巻頭寄稿文

「初音ミク」という方法

――日本的方法はどうやって復権したか――

デジタルハリウッド大学教授
／ 週刊アスキー総編集長

福岡 俊弘

0. 序

初音ミクという 16 歳の娘に関わり始めて 1 年が過ぎた。日増しに深い関係を持つようになり、今では彼女が耳元で囁かない日はない。

図 1 初音ミク

と、東京都青少年育成条例に触れそうな書き出しで始めてみたが、すでに多くの人がご存じの通り、元々「初音ミク」とは、DTM（デスクトップミュージック）ソフトのパッケージ名でしかない。その「初音ミク」がバーチャルアイドルという扱いを受け、社会現象の一部にまでなっていることは、よくよく考えると誠に奇妙な状況である。なにしろただの製品名である。その製品パッケージの表に書かれていた緑のツインテールの女の子が「初音ミク」だ。その女の子が、この 4 年間で 20 万曲以上もの歌を歌い、無数の動画となり、フィギュアになって人気を博し、ついには海外でコンサートを行なうまでに至っている。これは世間一般に言う「萌え」とも、どこか違っている（もちろん近い部分も多くある）。

オタク文化と一言で言い捨てることのできないこの不思議な現象を、まだ論考の途中ではあるが、ほんの少し紐解いてみたいと思う。

日本におけるCGM（コンシューマー・ジェネレテッド・メディア）を考える上で、多少なりともご参考になれば幸いである。

図 2 NOKIA シアター(コンサート会場)

図 3 LAコンサート(会場前で)

図 4 LAコンサート『MIKUNOPOLIS』

1.「初音ミク」とは

初音ミク」とは一言で言えば、Windows 上で動作する音楽ソフトである。以上。というわけにはいかないので、歴史を踏まえて簡単に解説を試みたい。

ヤマハが開発した音声合成技術に VOCALOID(ボーカロイド)という技術がある。これは歌詞とメロディーを入力するだけで、サンプリングされた人の声を合成、つまり「歌ってくれる」というものだ。システム的には、音符と歌詞の入力を行なう“スコアエディタ”、人の声をサンプリングしてデータベース化した“歌手ライブラリ”、これら2つから情報を受け取り実際の歌声に合成する“合成エンジン”の3つから構成される。

DTM ソフトとしての「初音ミク」は、このVOCALOID 技術の 2007 年 1 月に発表された 2 代目のバージョン、VOCALOID2を採用している。また、ライブラリ部分は、声優の藤田咲を起用し、彼女の声をサンプリングしている。開発は、札幌市に本拠を置くクリプトンフューチャーメディア社。このパッケージ「初音ミク」は、CV(キャラクターボーカル)シリーズと銘打たれ、同社から 2007 年 8 月 31 日に発売されたものだ。

図 5 パッケージ「初音ミク」

発売前から、「初音ミク」の前評判は高く、発売後すぐに、ニニココ動画を中心とする動画共有サイトに、初音ミクに「歌わせた」楽曲が次々と投稿される。ゲーム音楽にオリジナルの歌詞をつけたも

の、電車の発車ベル、有名な楽曲の替え歌、単なる喘ぎ声に至るまで、様々な楽曲（歌と到底呼べないものも含めて）が動画共有サイトを賑わし、そこに寄せられたユーザー（リスナー）のコメントがさらに、次の投稿を呼ぶという形で、スパイラル的に「初音ミク」は広まっていった。そして当然の流れとして、初音ミクオリジナルの楽曲が登場する。アーティスト“初音ミク”の誕生である。これは、パッケージの発売後わずか 1 ヶ月以内に起きたことである。個人的には、この先を考えるとき、日本音楽にとってもっとも重要な 1 ヶ月だったではないかと思う。

もうひとつ、初音ミクを語る上で重要なことがある。それは、発売元のクリプトンフューチャーメディア社が、二次創作を基本的に自由としたことだ。もちろん、遵守すべきいくつかのルールはあるものの、非営利で公序良俗に反しないものなら、自由自在に初音ミクを描き、許諾をとることなくネット上に公開してOKとしたのである。このことで、同人誌など限られた世界でのみ流通していた、日本の草の根のクリエイティブに火がついた。絵師と呼ばれる在野のイラストレーター、さらにその絵と音楽にインスパイアされて動画を創り始める、これまた在野の映像クリエイターも登場。かくして、新しい作り手が次々と参入（そのほとんどは素人）し、初音ミクをめぐる世界は加速度的に拡大することとなった。しかも、それに伴ってクリエイティブのレベルも飛躍的に向上、音楽の一ジャンルを十分に形成しうるところまで一気に駆け上がったのだ。

現在、初音ミクが歌った歌の総数は、20 万曲を超えると言われている。そしてその数は今も加速度的に増え続けている。

2. 2010 年 3 月 9 日の衝撃

この日は、「初音ミク」ファンにとって、関係者にとって、とりわけ初音ミク自身にとって、極めて重要な一日となった。場所は東京・お台場。約 2500 名の収容人員を誇るライブハウス、Zepp 東京で、初音ミクのライブコンサートが行なわれたのだ。3月9日、3と9でミ（3）ク（9）。さらに39を“サンクス”と読んで、「ミクの日感謝祭 / Miku 39’s Giving Day」とネーミングされたこのコンサートは、のちに伝説のライブと呼ばれるようになる。この日の昼公演を観に行った自分自身のレポートを、実況代わりに記したい。

その日の東京は、3月に入ったというのに朝から冷え込みがきつく、昼前には小雪が舞うほどだった。ゆりかもめの青海駅を降りてライブハウスに向かうと、すでに寒空の下 300 人ほどの列ができていた。が、並んでいる若者に聞くと、なんと夜公演の列だという。「一体、何が起きているんだ？」というのが、そのときの正直な気持ちだった。初音ミクの歌が人気らしい、ことは情報として知っていたのだが、ムーブメントとしてのそれは想像していなかったからだ。

そして、その運命のライブを観た。

ライブ会場を埋め尽くす若者、そのほぼ全員が緑色のサイリウムを振る。やがて、3Dの初音ミクがせり上がりでステージに登場したとき、驚きのあまり、開いた口がそのままになってしまった。本当にそこにいるかのように、彼女は歌い、踊っていた。いや、確かにそこにいた。ステージの進行とともに、なぜか涙が流れ、止まらなくなった。ホログラムのポップスターとサイリウムの海を長めながら、はらはらと泣けた。日本は、日本人は、こんなに素晴らしいもの

が創れるんじゃないか！

図 6 「ミクの日感謝祭」

3. 近松門左衛門「出世景清」

ここで、話は江戸時代へと遡る。人形浄瑠璃・文楽は、大阪・上方が発祥地だが、この芸能を生み出したのが、かの近松門左衛門である。近松は、17 世紀から 18 世紀にかけて、大阪・竹本座の座付き作家として数々の浄瑠璃台本を書き下ろす。その最初の作品（座付き作家としての）が「出世景清」なのである。

図 7 近松門左衛門

物語を簡単に紹介したい。

主人公は平景清、悪七兵衛という異名を持つほどの勇猛な武将で、源平合戦で活躍し、その怪力ぶりとともに多くの伝承が残されている人物である。物語は、源氏・平家の戦いが鎌倉方（源氏）の勝利に終わり、鎌倉の世になったところから始まる。

図 8 近松門左衛門・作『出世景清』

前段。落ち延びた景清は、熱田神宮の大宮司の娘の下に身を隠し、将軍・源頼朝の命を狙っている。大仏供養のときに頼朝を狙うものの、正体を見破られ、名刀「痣丸」（あざまる）を振りかざして、京都の遊女「阿古屋」のところまで逃げる。この景清と阿古屋の間には二人の子供がいることになっている。

二段目では、この阿古屋の兄である伊庭十蔵が裏切り、景清が隠れていることを訴え出ようとする。

阿古屋は最初反対するものの、そこへ先ほどの宮司の娘から手紙が届き、恪気を起こして密訴に同意してしまう。またも景清逃げる。

鎌倉方は景清の恩人である熱田神宮の大宮司を捕らえる。父を追ってその娘が京都へ上ったところ、娘は捕らえられ拷問にかけられる。そして、そこに景清登場。大宮司と娘の身代わりとして、あっさりと捕らえられる。これが三段目。

四段目。牢に入った景清の下へ、阿古屋が子供を連れて現われる。景清に許しを乞う阿古屋だが、これを許さない景清。ここで阿古屋は子供二人を守り刀で殺害し、自らも命を絶つ。号泣する景清のところへ伊庭十蔵が通りかかり景清を口汚く罵る。と、景清は牢屋をその怪力によって破壊し、伊庭十蔵の身体を真っ二つに裂いてしまう。

五段目（大詰）。時間が流れ、景清の生存を知った頼朝は、景清を許す。そして、景清も許しを乞うため頼朝の前に現われたのだが、頼朝の顔を見るや否や我を忘れて斬りかかってしまう。周りに制止されて我に返る景清。目が見えることがすべての原因、として、景清は自ら自分の目玉を刀で抉り出す。そして盲目になって日向に向かう。

という、とてつもない物語である。

さて、この異形の人物の物語と、初音ミクがどこで交錯するのか。実は、この『出世景清』、日本的マッシュアップの当時の集大成とも言えるコンテンツなのである。時代を下る過程で連綿と再編集が繰り返されてきた、「創作の連鎖」が、『出席景清』にはすべて盛り込まれている。

人々の伝承として語り継がれた景清像。幸若舞における「かげきよ」には、「あこわう」という名前の妻が登場し、ここでも景清は裏切られている。現在能の「かげきよ」には名刀「あざ丸」が登場し、頼朝を狙う場面が舞として演じられる。そして世阿弥の夢幻能「かげきよ」は、盲目の景清を娘が訪ねる話で、そこは日向の国なのである。

近松は、これらの、それまでに語られた、演じられた「景清」のエピソードと物語を再編集し、自らの浄瑠璃台本を書き上げたのだ。今風に言うと、カット&リミックス。マッシュアップと呼んでもいい。パクリでも盗作でもない。

ある物語にインスパイアされて、その要素を巧みに取り込みながらまた別の物語を創作する。まさに「創作の連鎖」。

図 9　近松門左衛門・作『曽根崎心中』

初音ミクは、日本が、日本人がもっとも得意としていた、この日本的とも言えるマッシュアップの技法を、再び現代にくっきりとした形で蘇らせてくれたのである。

4. ニコ動という張り出し舞台

もうひとつ、舞台装置についても言及しておきたい。

「初音ミク」を語る上で、動画共有サイト、とりわけニコニコ動画の存在は極めて重要だ。ニコニコ動画、通称、ニコ動と呼ばれる存在が、日本的コラボレーション、日本的創造の交換において、果たした役割は極めて大きいと言わなければならない。

ニコニコ動画もそのほかの動画共有サイトも、コメント欄というものがあり、動画コンテンツに対する共感や批判等が書き込めるようになっている。ニコ動が他と異なるのは、このコメントが、動画のタイムラインにひもづけられること、さらに、その動画の再生画面の上に表示されることだ（消せるようにもなっている）。

図 10 ニコニコ動画

疑似街頭テレビとも言えるこの仕組みは、自宅でひとりで動画を見ていても、時間をスワップする形で、自分以外のユーザー（視聴者）との共有・共感の意識が醸成される。優れた動画であれば、コメントも次々と寄せられ、共感の渦は一層増大する。また、動画へのツッコミ的なコメントが笑いを誘ったりすることも多く、従って、コメント自体も動画エンターテイメントの一部に組み込まれているのだ。この構造の中で、作り手（楽曲制作者または動画制作者）と受け手(ユーザー）の動的かつ創発的な交換がなされる。

この仕組みに似たものが、実は中世に存在した。しかもここ日本において。それが能の舞台である。

現在、能は、能楽堂のような場所で畏まって観るというものになっているが、かつては、客席とのインタラクションが盛んになされた芸能であった。そのインタラクションを保証していたのが、能の舞台構造である。

能舞台は、客席から見て左手に、演者が登・退壇する「橋掛かり」、正面には「本舞台」が客席側にぐっと張り出した格好になっている。これを張り出し舞台と言い、現在の劇場で主流のいわゆる額縁舞台とは構造的にかなり異なったものになっている。舞台には通常「幕」があるが、能舞台には存在しない。演じる空間と、観客の側の空間がシームレスなのだ。

シテ方は、5.5 平方メール四方の決して広くない本舞台で、面をつけ、人ならざる存在を演じ（舞い）、一方、ワキ方は常に人として、シテの相手役を演じる。そして、このワキ方は観客とのインタラクションを図る上での重要なインターフェースの部分を担っていた。客席からの掛け声、合いの手、それらもろもろ「受け手」側の情報を、「演じ手」たるシテ方に呼吸で伝える。これがワキ方の極めて大切な役割であり、これにより能は、動的なエンターテイメントとして「生きた」芸能として隆盛を誇ったのである。

今、その「生きた」という部分にフォーカスするなら、ニコニコ動画はまさに「生きた」インタラクションを保証してくれる構造を備えている。現代の「張り

出し舞台」。初音ミクは、このすこぶるダイナミックな舞台で歌い、踊り、多くのユーザーとのインタラクションによって育ってきたのだ。

5. CGMと「初音ミク」の未来

さて、最後にCGM（コンシューマー・ジェネレイテッド・メディア）そのものに言及しておきたい。

楽曲、動画、イラスト、フィギュア、ゲーム……。初音ミクは、すでに膨大な数の創作物と商品となっている。3Dモデルの初音ミクは、あにまさ式、Lat式、もちろんセガが創ったモデルも存在する。萌えアニメ風の初音ミクも、アメコミチックな初音ミクも、3頭身のミクもスタイリッシュなミクも。そしてそのすべて「本物」の初音ミクである。

しかしながら彼女に与えられた情報は以下の 3 点のみだ。16 歳、身長 158 センチ、体重 42 キロ。そして「初音ミク」のパッケージに描かれたあのイラスト。オフィシャルな情報はこれだけなのである。

このわずかなメタデータを起点に、日本的イマジネーションの大爆発が起きたのである。

実は、情報がほとんどない中で、やはり膨大な創作の連鎖が生まれたコンテンツが過去にある。それが、源義経である。義経は歴史上の人物ではあるが、史実として登場したのは、挙兵した頼朝の下へ参じた 22 歳のときからの9年間のみ。弁慶との出会いなど、現存する義経に関する逸話のほとんどは、その後の創作なのだ。能の「船弁慶」、人形浄瑠璃の名作「義経千本桜」、歌舞伎の「勧進帳」など、創作の連鎖、想像力の交換によって、義経は様々な物語に登場する。わずかなメタデータを足がかりに、ここでも日本的イマジネーションが爆発しているのである。

日本の芸能（音楽、物語、演劇）は、名もなき大衆が、その想像力を交換することによって進化を遂げてきた。そして時折、観阿弥・世阿弥親子や近松門左衛門のような優れたマッシュアップができる人物が現われ、芸能のレイヤーをさらに引き上げたのだ。

初音ミクは、こうした一連の進化のサイクルが、4年間という極めて短い期間で起こったものと言えよう。初音ミクの未来を予測することは難しい。が、初音ミクが、私たち日本人の中に眠っていた、想像と創作のマインドを呼び覚ましてくれたのは間違いない。それは簡単な言葉で言えば「みんなで創る」「みんなで育てる」ということだ。そしてそれができることこそが、世界に比類なき日本の強さなのだと考える。

・ ©CRYPTON FUTURE MEDIA, INC.
・ VOCALOID is a trademarked product of YAMAHA Corporation
・ MIKUNOPOLIS 2011 実行委員会

＊『出世景清』に関する考察は、松岡正剛氏の『千夜千冊』を元にしています。

＊能舞台に関する部分は、武邑光裕教授の知見を得て考察したものです。